

一八八三年一月一日(月)

タクール、聖ラーマクリシユナ、ドツキネーシヨル南神の寺院で

ラカール、プランクリシユナ、ケダル氏をはじめとする信者たちと共に

ドツキネーシヨル
南神にて、プランクリシユナ、校長たちと共に

タクール、聖ラーマクリシユナは、カーリー寺院のいつもの部屋に、信者たちといっしょに坐っておられる。終日、ハリの愛、大実母の愛に酔いしれて――。

床の上に広げてある敷物のところへタクールは行かれてお坐りになった。向かいあっているのはプランクリシユナと校長である。ラカールさんも部屋のなかにいる。ハズラー氏は部屋の外にある南向きベランダに腰掛けている。

寒いポウシユ月なので、タクールはモールスキンチャドールの部屋着を羽織っておられる。月曜日の午前八時、黒分の八日目、キリスト暦一八八三年一月一日。

タクールの、言わば内輪の身内と言える信者たちが、次々と集まってきた。ナレンドラ、ラカール、バヴァナート、バララーム、校長、バブラーム、ラトウたちが絶えず出入りするようになってか

ら、かれこれ一年前後になる。彼等より一年ほど前から、ラーム、マノモハン、スレンドラ、ケダ
ルが通つてきている。

およそ五ヶ月ほど前になるが、タクール、聖ラーマクリシュナは、ヴィディヤサーガルのパドウル
バガンを訪問された。二ヶ月前にはケーシャブ・セン氏の招待で、ヴィジヤイをはじめとする信者た
ちと共に蒸気船に乗つて、カルカッタまで楽しい船旅をなされた。

ブランクリシュナ・ムコパツダ氏はカルカッタのシャームブクル街に住んでいる。出身地はジャ
ナイ村である。株式取引所の顔役として相場の仕事を取り仕切っている人物だ。最初の夫人に子供が
できなかったので、夫人同意のもとに第二夫人をもらった。この二人の間には息子が一人できた。プ
ランクリシュナは、タクール、聖ラーマクリシュナをたいそう深く信仰している。なかなかカツプク
がよろしいので、彼のことをタクールはよく、おデブのバラモンとお呼びなる。非常に善良な紳
士である。約九ヶ月前にタクールは、彼の邸に信者たちといっしょに招待をお受けになった。ブラン
クリシュナは様々な野菜料理や甘いデザートなどをつくつて、皆にご馳走した。

タクールは床に坐つておられる。傍にジリピ（カントウに似た甘い菓子）をいれたカゴが置いてある。
多分、誰か信者が持参したものだらう。タクールはジリピを割りながら召し上がった。

聖ラーマクリシュナはブランクリシュナたちに向かつて、笑いながら――

「ホラ、ごらんよ。わたしはいつも大実母の名を称えているから、こんな甘い美味しいものが食べら
れるんだよ、アハハハハ。」

あの御方はね、ヘチマやカボチャ(大人の好物)なんぞは下さらない。——あの御方は、甘い、甘い、不死の果実を下さる。つまり、智慧^{ジュニヤト}、愛^{プレマ}、識別^{ウツツカ}、離欲^{ウツラキヤ}だ！」

部屋のなかに六、七才の子供が入ってきた。すると、タクール、聖ラーマクリシュナはさつそく子供と同じ様子になれる。ちょうど子供が、もう一人の別な子から食べ物を隠すように——。入ってきた子供に菓子を食べてしまわれないために、全く子供そっくりな身振りをなさった。タクールはジリピのカゴを両掌で隠して、だんだんご自分の近くに引き寄せて、片付けてしまわれた。

ブランクリシュナは家住期^{グリハスタ}にある人である。それなのにヴェーダーンタ哲学を学んでいて、いつも口ぐせのように、「ブラフマンのみ真実、この世は空虚^{さっかく}。あの御方こそ自分である——ソーナム」と言っている。それでタクールは彼に対して、「現代^{いま}は末世^{カユガ}で、物質(食物)が人々の主な関心の中心になるような時代だから、こういうときはナーラダの教える信仰が最も適しているのだ」と言いきかせておられる。

「形あるものを通さずに形ないものをとらえることなど、誰ができるものか！」

子供のように手のひらで甘い菓子を隠しながら、そのままタクールは三昧に入られた。

有象(形)の領域と姿形を見ること

タクールは三昧から、やがてかなり長い間、半三昧状態のまま坐っておられる。体は微動もせず、目も動かず、呼吸もあるのかないのかわからない。しばらくすると深く長い息をつかれ、五官の感覚

が戻ってこられたようである。

聖ラーマクリシュナはブランクリシュナに向かつて――

「あの御方は無形無相の实在だけじゃない、姿形だってちゃんとありなさるんだよ。お姿を見ることが出来るしね。形のあるものへの信仰を通して、あの何とも譬えたとようなない御姿を見ることが出来るのだ。大実母はいろんな御姿で会って下さるよ」

〔ガウランガを見ること――ラティの母の装束をした大実母〕

「昨日も大実母マに会った。赤土色ツルの衣装を着てね――縁に縫い目が全然ないやつだ。わたしと話をして下さったよ。

先だつては、イスラム教徒ムスリムの女の子の姿でわたしの傍にいらっしゃった。額に赤い印テラクをつけて――ハダカだった。六つか七つの女の子だった。わたしといっしょにあちこち歩きまわったり、ふざけ合ったりしたよ。

フリダイの家に行っていたとき、ガウランガ（聖チャイタニヤ）を見ることができた。黒ずくめの衣を着ていたよ。

ハラダリがいつも、『あの御方は有形、無形を超越している』と言っていた。それでわたしは、大実母のところへ行ってこう話したよ。『大実母マ、ハラダリがこう言いますが、それじゃ、形や色は一切切切ウソなんですか？』すると大実母はラティの母親と同じ衣装を着て、私のそばへやってきて

こう言ってくれた——『おまえはパーヴァにいなさい』だからわたしも、ハラダリにその通り言つてやつた。(訳註パーヴァ——パーヴァ・ムクタとも言い、絶対意識と相対界の境目に心を置いて、ブラフマンを静観することもできるし、また相対世界(この世)の活動にも従事できる境涯)

ときたま、このことを度忘れしてしまつて厄介なことが起こるよ。パーヴァにしつかり止ま^とつていないものだから、歯がカケてしまった。だから、神さまからはつきりしたご指図がないかぎり、または別な体験でもしないかぎり、パーヴァに住んでいようと思う。信仰を持つて住んでいよう! どうだい?」

ブランクリシユナ「おっしゃる通りでございます」

〔信仰の権化はなぜ現れるのか——ラーマの意思〕

聖ラーマクリシユナ「また何で、お前にこんなこと聞いたりするのかな。このわたしのなかに、誰かひとり居るんだよ。その人がわたしをこんなふうにさせるんだよ。時々、神様のような気分になつて、礼拝されないと心が落ち着かなかつたり——。

わたしは道具、あの御方が使い手。あの御方がさせる通りにわたしはする。言わせる通りにわたしは言う。

ラームブラサードがうたっているが——

大生命の海にわれ在りて

波のまにまに浮き沈み

潮の満ち干に往き還えり

大風が吹くと木の葉は、時によっていい場所に飛んでいつて落ちたり、また時によってはドブみたいな場所に落ちたりする。風の吹くまま受けて行くのさ！

機織りの職人たちがよく言うだろう。ラーマの思召しおぼしめでドロボーに入られて、ラーマの思召しでお巡りさんに捕まって、そしてラーマの思召しで解放してくれた。

ハヌマーンはいつもこう言っていた——『おおラーマよ、あなたにすべて委ねます(シヤラナーガタ)、あなたにすべて委ねます(シヤラナーガタ)。君の蓮華の御足に、心からなる信仰が持てるように——。そしてどうか、君の世にも美しい幻象マヤに迷わせられないように！』

大ヒキガエルは、死にかかったときにこう言ったよ。『へびに捕まったときは、ラーマよ、助けて！』と大声で叫んだ。だけど今は、ラーマの矢に当たって死ぬところだから、私は黙って何も言わない』とね。

以前は直じかに見えたものだ——この目でね！ ちょうどお前たちを見ているように——。いまでは、前三昧状態サマヤのときあの御方が見える。

神様をつかむと、子供のような性質になる。ある神様のことを深く思うと、その神様の特徴トクが表れてくる。神様の性質は子供そっくりだ。子供が積木遊びで家を建てたり壊したりするが——あの御方もあんな具合に、創造、維持、破壊をなさる。子供ほどの性質グナの支配も受けていないが——あの御方

も調和、サツトウ積極、ラジヤス消極の三グナを超えていらつしやる。

だから、バラムハシヤ大覚者たちは五人、十人の子供らをそばにおくのだ——子供らの性質を身につけるためにね」
アガルバラ（南神寺から5 km程北西）から二十二才くらいの青年が一人やってきた。この青年は来るといつも、タクールに目配せして人のいない場所に連れ出して、自分の考えていることをヒソヒソと打ち明けるのだった。最近、頻繁に来るようになった人である。今日はこの青年は、タクールの傍にいつて床に坐っている。

〔女性の気持ち、および性欲の克服——無邪気と神の体得〕

聖ラーマクリシュナ、その青年に向かつて——

「ほかのものを真似まねていると、自分の性質も変わってくる。女性の習慣くせや気分も真似ているうちに、だんだん色欲などの情念はなくなっていく。まったく女のような振舞いをしてみるんだよ。ほら、芝居で女形をする人たちが水浴びするとき、まるで、女とそっくりなやり方で齒をみがいたり、しゃべったりしているだろう。」

きみ、土曜か火曜にまたおいでよ！

こんどはブランクリシュナに向かつて——

「プラフマンとシャクテイ（造化力）は同じものだ。シャクテイを認めないと世界は空虚アディヤクテイになってしまふ。わたし、お前、家屋敷、家族——みーんな虚だ、錯覚だ。この根本造化力があるからこそ、世

界は成り立っているのだ。枠組みの支柱がなくては枠は組めない。そうすると美しいドゥルガーの神像も作れない。

世俗の知恵を捨てなければ、靈性は目覚めないよ。至高至聖のものがつかめない。世間知があるかぎり、どうしても偽善になる。無邪気にならなけりや、あの御方にふれることはできないよ。

欺瞞うそと小利口さりと捨てて

奉仕と祈りと素直さと

内にも外にも心の底から

あふれるばかりの信仰あれば

いますぐラーマのお身内よ

(ヒンディー語)

世間並みの仕事をしている人たち——つまり役所や会社に勤めたり商売している人たちだって、誠実でなけりや！ 誠実であるということが今の時代の修行だよ」

プランクリシュナ「真実にあふれ、五官の迷いに打ち克かち、世のためにつくす人は高貴なるかな。正法に生きる人、そは神そのものなり(サンスクリット)。マハー・ニルヴァーナ・タントラにこう書いてございます」

聖ラーマクリシュナ「うん、そういうことがよくわからなけりやいけない」

タクール、聖ラーマクリシュナのヤシヨーダーの状態と三昧

タクールは小さい木製ベッドの上で、ご自分の坐り方アールサナで坐っておられる。こうした場合は通常、前三昧状態である。恍惚ウツトウとした眼差しでラカールを眺めておられる。そのうちに、親のような愛情が満ちあふれた様子で、お体がゾクゾク震えてきた。ちようどこんな目つきで、ヤシヨーダー（クリシュナの養母）はゴパール（クリシュナの幼名）を見ていたのだろうか？

ラカールを眺めているうちに、また、タクールは三昧に入られた。部屋の中にいる信者一同は、感嘆のあまり水を打ったように静まりかえって、タクール、聖ラーマクリシュナの、この素晴らしい御様子を拝見している。

やや普通の状態に戻られ、こんなことをおっしゃった——「ラカールを見ると、どうしてこんなに高揚するのかな？ とにかく、先へ進めば進むほど、神様の威厳は少なくなってくる。修行のはじめのころは、十本腕のドウルガー女神の姿が見える。こういう姿には、神様の威光がうんと多く表されているんだ。次の段階では二本腕の姿で——もう手が十本もついでないし、大袈裟な戦道具いくども持っていない。その次はゴパールの姿が見える。何一つ威光を表すものもないただの幼児の形だ。まだその後がある——ただ光を見るだけになる」

〔三昧後の正しいブラフマン智の状態——分別判断の思考と執着の捨離〕

「あの御方をつかんで、あの御方を通して三昧に入ったら、分別知はもうなくなる。

分別知識はいつまでであると思うかね？ 多々を感じている間、つまり、いろんな生き物がある、世界がある、私とかお前とか、こういう感じを持っている間だ。完全に正しい一つの智慧が生まれたら黙ってしまふ。トライランガ・スワミ（沈黙の行をしていたベナレスの有名な聖者）のようにね。

バラモン達が食事するときの様子を見たことがあるかい？ はじめの間は、ワイワイ、ガヤガヤ、大変な騒ぎだ。胃袋がいっぱいになるにつれて騒ぎは少なくなってくる。食後のヨーグルトや甘いものを食べる段になると、ただ、シュブ、シュブという音だけ！ ほかには何の音もしない。そしてその後は眠り——サマーディだ。そうならば全く静かなものだ！」

それから、校長やブランクリシユナに向かつて——

「皆、よくブラフマン智の話をしますが、実際には、低い下の物にかかずらっている。家屋敷、金、名譽、五官の楽しみといったものに。記念塔（オクタローニ記念塔）の下にいる間は、車だの、馬だの、西洋の紳士・淑女だのがやたらに目に入ってくる。上に昇れば、ただ大空や海が果てしなく広がっているだけ！ そして、建物や、馬や、人間どもはどうでもよくなるんだ。みんな、アリンコみたいに見えるからな！

ブラフマン智が生じると、世間の事への執着や女と金への渴きはみんな消える。みんな静かに平安になる。薪が燃えている間は、パチパチ音をたてるし炎（ほのお）をあげる。燃えつきて灰だけになれば音も立てない。執着がなくなれば興味もなくなる。さいごは平安だ。

神様に近づけば近づくほど、静かで安らかだ。平安（シャーンティ）、平安（シャーンティ）、平安（シャーンティ）。完全な平安。ガンガーの近

くに行くほど涼しくなるだろう。水浴びすれば一段と気持ちよくなる。

さて、生き物とか世界とかいう二十四の宇宙原理だがね、こういうものは皆、あの御方がいらっしやるからあるんだよ。あの御方をのけたら何一つ無いんだ。1の後に沢山0をつければ際限もなく数が増えていく。1を消してしまえば、0には何の意味もなくなってしまう」

ブランドリシユナへ恩寵を与えるために、タクールはご自身の境涯に関連させて、それとなく彼に教えられたのだろうか？

タクールはつづけてお話しになる――

〔タクールの境涯――ブラフマン智を得た後の「信仰の私」〕

「ブラフマン智を得た後、つまりサマーデイの後でも、人によってはそこから下りてきて、^{グワイデイヤ}明知の私^グや^{バクテイ}信仰の私^グを残しておく。市場^{バザール}がお仕舞いになっても、自分の好みで市場に居つづけるのだ。ナラダ達のようにね。あの人たちは世の人々を導くために^{バクテイ}信仰の私^グを残しておくきなすつたんだよ。シヤンカラ^{デーチャリヤ}大師の場合は違うよ――あのお方は、^{ツツ}明知の私^グを残しておくきなすつた。

ほんのちよっぴりでも愛欲の執着が残っていると、神様はつかめないよ。糸にケバがたつていては針の穴に通らないからね。

神様をつかまえないすつたお人の欲望や怒りは見かけだけのもの。焼けた縄のようなものだ。縄の形をしているだけ。フーツと吹けば飛び散ってしまうさ！

心の中に何の執着もなくなれば、あの御方に会える。清浄純粹な心に浮んでくるのは、すべて神の言葉だ。純粹な心は、純粹な知性——真我そのものだよ。なぜかって？ あの御方のほかには完全に清浄純粹なものはないからね。

ところで、あの御方をつかんでしまうと、善も悪もなくなるよ」

こうおっしゃってから、タクールは楽神もハダシで逃げ出すような絶妙無類の声調で、ラームブラサードの詩を詠唱された。

「カーリーー カルパタルの根元に

心よ 行つて四つの実を摘もう

欲ブラウリッテイと 無欲ニヴリッテイの二人の妻は

無欲クニヴリッテイの方を つれて行き

識別ヴィヴエーカという名の その息子に

真理まことの道を 尋ねよう

カルパタル——万願成就の木

四つの実——正義ダルマ、富アルタ、愛カーム、解脱モクシヤ

タクール、聖ラーマクリシュナにおける聖ラーダーの心情

タクールは、南東のベランダに行つてお坐りになった。プランクリシュナはじめ他の信者たちも、

いっしょにそちらへ行つた。ハズラー氏もベランダに坐っている。タクールは笑いながらブランクリシユナに向かつてこうおっしゃる――

「ハズラー(千という意味は、なかなかどうして大したものだよ、少ない数じゃないもの。もしここに(タクール自身を指す)大きなダールガー(イスラムの靈廟)があるとしたら、ハズラーは小さいダールガーさ」
皆、大笑いである。

ナヴァ・クマールという男がベランダの入口のところまで立っていたが、信者たちが大ぜいいるのを見ると踵かかとを返して出ていった。タクールは、「ありや増上慢の見本だね」とおっしゃった。

時間は(午前)九時半になった。ブランクリシユナは拝跪はいきしてお暇いとまご乞いをし、カルカッタの自宅に帰つていった。

一人の巡礼吟遊僧が一弦琴を鳴らしながら、タクールの部屋のなかで詠歌をうたっている――

ニティヤーナンダの船は来たれり

もろびとよ いざうち乗りて

彼の岸に 渡りゆくべし

六人の雄々しき戦士

大船の扉ひらきて

マニ宝珠わけあたえつつ

信仰の人を常に護らん

別な歌を――

時はいま 屋根葺きかえる時はいま
もうすぐボルシャの雨がふる
サアサ元気を出して気をつけて
せつせと仕事にはげみましょ
雨のさかりのスラボン月は
屋根葺くひまもあらばこそ
屋根のまこもは湿って腐り
大風吹けば棟吹き飛んで
大穴が天井にあいてから
びっくりあんぐり口をあけても
あいた口はもうふさがりませぬ
どうにも仕様がありません

ボルシャ――六月中旬から八月中旬の雨季のこと。ベンガル地方には、春、夏、雨季、秋、冬、霜季の六つの季節がある。

スラボン月――七月中旬から八月中旬

また別な歌を――

いずれの道たどりきて　　この川辺に

貧しき衣　身にまとい

ただひたすらに　　神の名呼ぶ

いずれの道たどりきて　　わが身とこころ

かくなりしものか

ああわれ知らず　　神の名を呼ぶ

タクールが詠歌を聞いておられると、ケダル・チャトジー氏が入ってきて拝跪はいきした。彼は役所の制服を着て来た。ゆつたりした上着から、時計と金ぐさりがのぞいている。だが、神様の話が始まると、彼の目はすぐ涙で潤うるむのである。まことに信愛あふれる人物だ。心はゴープー(プリンターヴァンの牧場でクリシユナを恋慕った牛飼いの女たち)のような気持ちの人のだ。

ケダルを見ると、タクールはたちまちプリンターヴァンでの神クリシユナの遊戯リライの気分になつてしまうのだ。愛に酔つたように立ち上がり、ケダルに語りかけるかのように歌をうたいはじめられた。

友よ！

まだ着かないの？

私の美しいシヤーマシヤーマ スンダル（クリシユナ）がいる森に

私は疲れて もう歩けない！

聖ラーダーの気分で歌っておられるうちに、タクールはサマーデイ（三昧）になられたようである。彫像のように立ったまま、両眼のすみから歓喜の涙がしたり落ちています。

ケダルは平伏した。そしてタクルの御足ゆかに額ぬかずいて讃辞を捧げた。

心の蓮華の中心 絶対にしてすべてを超越し

ヴィシユヌとシヴァとブラマーを学び得る

ヨーギーの最深の瞑想によりて到り得る

誕生と死と苦ことごとを悉く滅し去る

真理の智 存在の本質 すべてことごとの世の種子なる

至聖のブラフマン意識を礼拝し奉る

しばらくすると、タクール、聖ラーマクリシユナは平常の意識に戻られた。ケダルは自宅のあるハ

リサハールからカルカタへ、仕事に行くところなのだろう。道すがら、南神村ドブネーシヨルのカーリー寺院に寄つて、聖ラーマクリシュナにお会いしたのである。少々休んでから、ケダルはおいとましました。(訳註——ハリサハールから南へ30kmで南神寺ドブネーシヨル、更に南へ10kmでカルカタ)

このようにして、信者たちと語り合う間に、時間は十二時になった。ラームラルさんが真鍮製の大皿に、大実母カーリーへの供物のお下がりを持ってきてタクールに差し上げた。部屋の中でタクールは南向きに坐られ、それを召し上がった。その食べ方はまるで子供のようで、いろいろな種類の食べものを、全部一口ずつ口にお入れになる。

食事の後、小さい寝台の上ですこし休んでおられる。やがて、マルワリの信者たちが入ってきて座に着いた。

アヴィヤーサ・ヨーガ——二つの道——分別判断と信仰

午後三時ころ、マルワリの信者たちが、床に坐つてタクールに質問している。校長、ラカール、そのほかの信者たちが部屋にいる。

マルワリの信者「お聖人さまマハーラージュ、どんな方法で修行したらいいのでございますか?」

聖ラーマクリシュナ「二つやり方がある。分別判断の道と信仰の道だ。

分別判断とは真理と非真理を判断すること。

真理そのもの、永遠の真実在は神様だけで、ほかは皆、すべて非実在で無常のものだ。魔術師だけ

がほんとうにいるので、魔法で現れて見えるものは、いわば錯覚なんだよ。これが分別判断だ。

ツイエウカ ツアイラキヤ

それから識別と離欲。いま言った真理と非真理、実在と非実在をよく考えて判断することを

ツイエウカ

識別というのだ。ツアイラキヤ離欲というのは、世俗的な事や物に対して嫌気を感じるのだ。これは

いっぺんにはできない。毎日、毎日、訓練しなけりやだめだ。とにかく先ず、女と金から心を放さなけりやいかん。それから神様のご意志で——心の中からも、実際に行動する上でも——この二つを捨て切るのだ。カルカッタで生活しているような連中に向かつて、神様のために何もかも捨てろゝなんて言ってみても仕様がなからね。先ず、心の中から放せゝと言うわけさ。

アツイエウサ

訓練のヨーガで、だんだんと女と金から執着心が離れていく。ギターにこういうことが書いてある。訓練のヨーガによつて心に特殊な力を生じ、感覚を抑え、色欲、怒りを制することが困難でなくなる。たとえば、亀が甲羅の中に手足を引っ込めて、斧オノで四つ割にされても外に出ないように——マルワリの信者「お聖人さま、二つのやり方があると仰せられました——別な方法とは、どのようなものがございますか？」

聖ラーマクリシュナ「恋慕う、または信仰の道だ。居ても立つてもいられないほど恋慕う、ただ、ただ泣く——独りで人知れず、お姿を見せて下さいと頼んで——。

心をこめて呼んでごらん

シャムマ大実母はきつと来てくれる——

マルワリの信者「お聖人さま、形ある神（人格神）を拜むのは、どんな意味があるのでございますか？」

また、形のない神——何の性質もない神とは、いったいどういうことなのでございますか？」

聖ラーマクリシュナ「お父さんの写真を見るとお父さんを思い出す。ちょうどそれと同じことで、神像を拝みつづけていると、実在の相すがたが見えるようになるんだよ。

人格神の形はどういうものか、わかるかな？ 溢れ出る水の中に、泡うぶが浮かぶ——あの様子だ。無限の宇宙と無限の意識から、一つ、一つと形かたちが浮き上がってくるのが見えるんだよ！ 神アウアクトーラの化身といわれるのもその一つだ。神の化身の遊戯三昧は、根元造化力アディヤンケテの楽しい遊びだ」

〔学問——私は誰？ 私はお前〕

「学問なんか何になる？ 恋い慕って呼べばあの御方が得られるのに。いろんなことを知る必要はないよ。

霊アーチャーリヤの教師になる人なら、あれこれ沢山知っていなけりゃならん。他人を殺すためにはデカイ刀もあるさ。けれども自分を殺すためなら、針一本か爪切り一つあれば間に合うんだよ。

ワタシというものはいったい何者なのか、これを探していけばあの御方にふれることが出来る。私は肉か？ それとも骨か、血か、髄か？ それとも心か？ 頭脳あたまか？ 最後に、自分はこの中のどれでもないということがわかる。これではない(ネーテイ)、これではない(ネーテイ)だ。真我アーヤンを手でつかんだりさわったりする方法はない。あの御方は性質グナを超越トラスして、添え物ウパティもないからね。

とはいうけれども、信仰者にとっては、あの御方にはありとあらゆる相すがたがあるし性質もある。たま

しいのこもったシャーマの神像、靈験あらたかな聖地。そうさ、すべてのものに靈魂たましいがあるんだよ！」

マルワリの信者は、礼拝しておいとまを告げた。

〔南神村ドツキネシヨルの夕暮れと献灯アールラテイ〕

夕暮れになった。タクルルはガンガールの流れを眺めておられる。部屋にはランプがつき、聖ラーマクリシユナは寝台の上に坐って宇宙の大実母の名を称えながら、あの御方に想いをはせておられるのだろう。

神殿では献灯アールラテイが始まった。堤防の上や五聖樹台パンチャパテイのあたりを散歩している人々は、遠くから聞こえてくる甘美な鈴の音色を聞いている。

折しも潮が満ちてきて、河の水がチャプ、チャプと音をたてながら河上にはぼつていく。献灯アールラテイの鈴の音とこの水の音とがいっしょになって、一層、甘くやさしい響ひびきになっている。こうしたなかに、神フレマの愛に狂喜して、聖ラーマクリシユナは坐っていらつしやるのだ。周囲あたりのすべては甘やかに美しい！そして、お胸のうちも甘くやさしい。何もかも甘く、やさしく、うつくしい！

〔訳註〕添え物(ウバーデイ)——肩書きや称号など、無智のためにアートルマンの上に重ねられた限定。例えば——私はは学者だッ、私はは何某の息子だッ、私はは金持ちだッ、私はには身分があるッ——これによって俗世間に縛られている。